

神を礼拝する者の心得

ヨハネの福音書 4章 16-26節

はじめに

私たちの教会は、今年から月ごとのテーマを決めています。いずれのテーマも、信仰生活の基本となるものです。8月のテーマは「礼拝」です。

今日は、ひとりの女性とイエス様の会話から、「礼拝」について学んでいきましょう。

1. サマリヤの女性の渇き

今日の聖書箇所に出てくるひとりの女性は、サマリヤ人の女性です。

サマリヤ人はもともと、ユダヤ人と一つの民族でした。旧約時代のイスラエルが北イスラエルと南ユダに分かれた時、北イスラエルの首都となったのがサマリヤでした。しかし、北イスラエルは、アッシリア帝国に滅ぼされ、首都のサマリヤには多くの異邦人が移り住み、占領されました。そしてサマリヤには様々な宗教が持ち込まれ、偶像礼拝が行われるようになりました。しかしサマリヤの人々は、決して主なる神様を礼拝することを止めませんでした。彼らは、主なる神様を礼拝しつつ、異教の偶像も同時に礼拝したのです。彼らは、主なる神様を礼拝しましたが、決して主なる神様だけを礼拝したわけではなかったのです。

南ユダの流れを汲むユダヤ人にとっては、主なる神様だけではなく異教の偶像も同時に礼拝するサマリヤ人は、純粋な信仰を持っていない汚れた人々と見るようになったのです。

ユダヤ人は、南ユダの首都であったエルサレムに神殿を建て、そこで主なる神様を礼拝しました。一方、サマリヤ人は、モーセが祝福の山と言ったゲリジム山に神殿を建て、そこで主なる神様を礼拝したのです。

サマリヤ人とユダヤ人の間では、主なる神様を礼拝すべき場所を巡って争いがあったのです。20節にあるように、サマリヤ人は主なる神様を礼拝すべき場所は「ゲリジム山」であると語り、ユダヤ人は「エルサレム」であると言ったのです。

このように今日の聖書箇所に出てくる女性は、ゲリジム山で主なる神様を礼拝し、同時に異教の偶像も礼拝する女性であったと考えられます。

しかし彼女は、一般的なサマリヤ人ではありませんでした。18節にあるように、彼女には過去に五人の夫がいました。おそらく結婚と離婚と再婚を五回も繰り返したのです。そして今は、正式な夫婦関係ではない男性と同棲している状態であったのです。

イエス様と彼女が出会ったのは、昼間の井戸でした。一般的なサマリヤ人は、昼間の暑い時間帯に井戸に水を汲みには来ませんでした。彼女は、人目を避けて、昼間の暑い時間帯に

井戸に水を汲みに来たのです。このことから、彼女が一般的なサマリア人ではなく、倫理的に問題がある女性と見られ、人々から軽蔑され、サマリア人の社会からも孤立した人であったことが分かります。

イエス様には彼女の人生が、飲んでも渴いてしまう水を、一生懸命飲み続けているように見えたのです。そこでイエス様は彼女に、「決して渴くことがない生ける水を与えよう」と言われたのです。

2. まことの礼拝

イエス様と彼女の会話は、次第に「礼拝」のことになっていきます。イエス様が彼女の私生活をすべてご存知であることを知った彼女は、イエス様こそ「預言者」であり、主なる神様から遣わされた方であると考えようになりました。

そこで彼女は、イエス様に、主なる神様を礼拝すべき場所はどこなのか？と尋ねます。サマリア人が主張するゲリジム山なのか？それともユダヤ人が主張するエルサレムなのか？主なる神様から遣わされた預言者なら、本当に礼拝すべき場所を知っているに違いないと思ったのです。

するとイエス様は、21 節でこのように言います。「**女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます**」。

イエス様はここで、新しい時代の礼拝について語ります。それは、神の子であるイエス様がこの世に来られた時から始まる「新約時代の礼拝」についてです。

その新約時代の礼拝の特徴の一つは、特定の場所に縛られないということです。

そしてもう一つは、主なる神様を「父」として礼拝するということです。当時のユダヤ人やサマリア人にとって、主なる神様を「父」とするということは、あり得ないことでした。ヨハネ 5：18 には、「**ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが…神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである**」とあります。主なる神様を、自分の「父」と呼ぶことは、神様への冒瀆と考えられていたのです。それぐらい当時の人々にとって神様は、恐れおおい方であり、近づき難い方であったのです。

しかしイエス様は、新約時代の礼拝は、主なる神様を「父」として礼拝するのだと言われるのです。主なる神様を「父」として礼拝するということは、自分は主なる神様の子どもであると認識して礼拝をするということです。

私たちが礼拝する時に大切な姿勢は、主なる神様は私たちの「父」であり、私たちは主なる神様の「子ども」であると覚えながら礼拝することです。

しかし、私たちがどうして神様を「父」と呼び、神様の「子ども」とされるのでしょうか。私たちにそのような資格があるからでしょうか。そうではありません。私たちは生まれながらに罪の性質を持っている罪人です。神様の命令に従わず、神様の御心を痛め、神様の怒りと呪いに値する存在です。永遠のいのちは愚か、永遠の地獄の刑罰を当然の報いとして受け

るべき存在です。到底、神様を「父」と呼び、神様の「子ども」とされるに値しない存在です。そのような私たちが、どのようにして神様を「父」として礼拝することができるのでしょうか？

それは、「御霊と真理によって」礼拝することによって、です。23 節でイエス様はこう言われます。「**しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。**」

私たちは、「御霊と真理によって」礼拝する時、主なる神様を「父」として礼拝することができます。では、「御霊と真理によって」礼拝するとは、どういうことでしょうか？

イエス様は、ヨハネ 14：6 でこう言われました。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。**」イエス様は、真理である方です。真理によって礼拝するとは、イエス様を通して礼拝するということです。イエス様を通さなければ、誰も神様を礼拝することはできないのです。

私たちは罪の性質を持つ存在ですから、そのままでは神様の前に出ることも、受け入れられることもできません。旧約時代には、礼拝には動物のいけにえが必要でした。動物の血が流され、罪が贖われる必要がありました。しかし新約時代では、イエス様が十字架で血を流し、私たちの罪を贖ってくださいました。イエス様が御自身の命をいけにえとして捧げてくださったのです。

私たちは、イエス様の贖いがあるからこそ、神様を礼拝することができるのです。イエス様の贖いがあるからこそ、神様を「父」として礼拝することができるのです。

イエス様は、サマリヤの女性に向かって、「**女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます**」と言われました。私たちは、イエス様を自分の罪を贖ってくださった救い主（キリスト）と信じる時、神様の子どもとされ、神様を「父」として礼拝することができるのです。

では御霊によって礼拝するとは、どういうことでしょうか。パウロは、ガラテヤ 4：6 でこのように言っています。「**あなたがたが子であるので、神は、『アバ、父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。**」私たちは、イエス様を信じ、聖霊が心に与えられると、神様を「父よ」と呼ぶことができるようになるのです。聖霊は、私たちを新しく生まれさせ、私たちを神様の子どもとしてくださる方です。

新約時代の礼拝のあり方は、特定の場所に縛られることなく、主なる神様を「父」として礼拝するものです。そのために、私たちは「御霊と真理によって」礼拝しなければなりません。「御霊と真理によって」礼拝するとは、イエス様を通して礼拝するということであり、イエス様を自分の罪を贖ってくださった贖い主と信じ、聖霊を通して新しく神様の子どもとして生まれて、神様を「父」と呼んで礼拝することです。

3. 渴く水ではなく、生ける水を！

私たちは、イエス様を信じ、「御霊と真理によって」神様を父として礼拝する時に、生ける水を与られます。生ける水とは、決して渴くことがない水であり、永遠のいのちへと導かれる水です。その生ける水は、神様を父として礼拝する時に、私たちに与えられるのです。

サマリアの女性は、おそらくゲリジム山で主なる神様を礼拝していました。しかし彼女は、同時に偶像も礼拝していたのです。彼女の偶像は、異教の神々であるよりもむしろ、男性でした。パウロは、コロサイ 3:5 でこのように言っています。「**淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です**」。

彼女は、五回も結婚と離婚と再婚を繰り返し、なおも違う男性と同棲を続けていました。彼女は、男性からの愛を過剰に求めていました。彼女は、男性からの愛で心を満たそうとしていました。しかしどんなに求めても決して満たされない。求めるたびに自分も相手も傷つき別れてしまう、次こそはと思うけれども、やはり自分も相手も傷つき別れてしまう、そんな生活を繰り返していたのです。それはまるで、飲んでも飲んでも渴いてしまう水を飲み続けるようなものでした。彼女は、渴いては飲み、渴いては飲みという生活を繰り返し、心も体もボロボロになり、社会的にも孤立していったのです。

彼女に必要なのは、主なる神様を「父」として礼拝することでした。そして男性からの愛ではなく、父なる神様からの愛で満たされることでした。それこそ決して渴くことがない、永遠のいのちへと続く生き方でした。

おわりに

私たちは決して、彼女のことを他人事のように考えることはできません。私たちも主なる神様を礼拝すると同時に、様々な偶像を礼拝しているからです。偶像礼拝とは、異教の神々を礼拝することだけではありません。貪欲も偶像礼拝なのです。何かを過剰に求めることは、偶像礼拝なのです。人からの評価を過剰に求めることも偶像礼拝です。食べ物やお酒を過剰に求めることも偶像礼拝です。神様以上に大切に思うもの、それが私たちの偶像です。時には、自分の夢やビジョン、家族、お金も偶像になります。偶像は私たちに、生ける水を与えてはくれません。偶像は、一時的に私たちの心を満たしてくれますが、またすぐに渴いてしまうのです。

イエス様は私たちに、決して渴くことがない生ける水を与えることができる方です。生ける水は、イエス様を信じ、「御霊と真理によって」主なる神様を「父」として礼拝する時に与えられるのです。イエス様を通して主なる神様を心から礼拝する時に、生ける水が私たちの心に流れ込んでくるのです。

私たちはなぜ主なる神様を礼拝するのでしょうか？礼拝にこそ、決して渴くことがない生ける水があるからです。

天におられる私たちの父である主なる神様。

私たちの心は、様々な偶像で満ちています。私たちの心は、神様以外のものに依存し、信

頼しようとしてしまいます。目に見えない神様よりも、目に見えるものに頼ろうとしてしまいます。しかし偶像は決して、私たちの心を満たしてはくれません。私たちの心から不安を取り除いてはくれません。私たちの心を満たし、私たちに全き平安を与えてくれるのは、あなただけです。イエス様を贖い主として信じ、神様と和解し、神様を父として礼拝する時にこそ、私たちの心は満たされます。

どうか私たちが、偶像を追い求めるのではなく、主なる神様だけを礼拝することができるように導いてください。飲んでも渴いてしまう水を追い求めるのではなく、決して渴くことがない生ける水を求めることができるようにしてください。

この祈りを、私たちの贖い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。